

2024 年 7 月 3 日

公益社団法人 日本栄養・食糧学会 御中

第 3 回日本医学会連合 Rising Star リトリート 参加報告書

防衛医科大学校 医学教育部 分子生体制御学講座

豊田 優

私は、日本栄養・食糧学会より推薦していただき、第 3 回日本医学会連合 Rising Star リトリート「Deciphering Biomedical Systems—生物医学研究最先端—」(2024 年 6 月 19 日～21 日 函館大沼プリンスホテル／北海道大沼国際セミナーハウスにて開催)に参加させていただきました。推薦してくださった先生方をはじめ、関係者の皆さまに深くお礼申し上げます。

本リトリートは、一般社団法人 日本医学会連合に加盟する学会のうち、15 の基礎部会加盟学会によって運営されており、各基礎部会加盟学会から 5 名(5 つの当番学会:今回は日本免疫学会が世話人代表)ないし 2 名(それら以外の加盟学会)の新進気鋭の若手研究者を推薦し、分野横断的交流を行うことで、我が国の基礎医学における研究力の向上に資することを目的とした合宿形式の企画です。第 3 回リトリートでは、15 の基礎部会加盟学会に日本感染症学会(臨床内科部会からの招待とのこと)を加えた、合計 16 学会:58 名(配布された参加者名簿参照)による活発な研究交流が行われました。竹田潔先生(大阪大学)による特別講演以外は、若手研究者による発表あるいはブレイク／オリエンテーションの時間に充てられており、参加者間の交流に重きを置くプログラム構成となっていました。参加当時、私は 39 歳男性・講師(学内准教授)であり、参加者全体の中央値に近い印象を受けました。私にとってはほとんどの方が初対面という状態からのスタートでしたが、幸い似たようなライフステージ・職位にある方も多く、学術的な内容以外のこと、たとえば大学業務やプライベート(キャリアや家事・育児など)の話題においても積極的にコミュニケーションをとることができました。リトリート会場だけでなく、函館空港での待ち時間や現地でのバス移動においても参加者同士の交流が進んだ点も、後から振り返ってよかったと感じる次第です。

参加者による研究発表は、口頭発表(15 分+5 分質疑:25 演題)もしくは、ポスター発表(25 演題)であり、いずれもハイレベルな内容(各学会の年会におけるシンポジウム講演と同等もしくはそれ以上のものがほとんど)ばかりでした。若手研究者全員に発表の機会が与えられ、リトリートのひと月半ほど前(2024 年 5 月上旬)に発表形式についての指定をいただきました。ご自身の研究成果を中心とした体系的なお話をされる方や、多くの未発表データも見せてくださる方など、発表スタイルも多岐に富んでおり、異なる分野の研究者が一堂に会することで得られた「気づき」が各参加者にあったものと推察します。私自身としても、深夜まで続く熱心な議論に每晚参加させていただき、同世代の研究者から大いに刺激を受け、これからも研究を頑張ろうと決意を新たにしました。今回のリトリートで得られた出会いを大切にして、研究・教育力のさらなる向上のみならず、コラボレーションを通じて新たな研究領域を切り拓いていけるよう努力していきたいと考えています。

本リトリートは、日本の国内学会では割と珍しいスタイルでしたが、扱うトピックの専門性を拡大した Gordon research conference/seminar のような雰囲気でした。服装もスマートカジュアル／カジュアルであり、リラックスした環境でサイエンスと自然の両方を満喫しながら、大いに学び・楽しむことができました。また、日本栄養・食糧学会からのもうひとりの参加者である松村成暢先生(大阪公立大学)とも親睦を深めることができ、今後の学会活動においても有意義な機会となりました。このようなリトリートの場に、日本栄養・食糧学会に所属する若手研究者が参加できることはきわめて貴重であると改めて実感しています。本リトリートが継続的に企画され、学会内外における交流の輪が広がっていくことを期待しています。

第3回日本医学会連合 Rising Star リトリート参加報告書

大阪公立大学生活科学研究科

松村成暢

私は、日本栄養・食糧学会近畿支部より推薦していただき第3回日本医学会連合 Rising Star リトリートに参加させていただきました。まずは、近畿支部より推薦して下さった先生方ならびに理事会で推薦して下さった先生方にあらためて御礼申し上げたいと思います。本会は日本医学会連合に所属する学会の中で、主に基礎系の学会からそれぞれ若手の優秀な研究者を選出し、研究発表ならびに情報交換を行うものでした。これにより異分野の共同研究を積極的に進めていき、日本の科学の底上げを行うという主旨があり、これまで実際にこの会から多くの共同研究が生まれています。

参加者は当然のごとく全員異分野の優秀な研究者ばかりで、どの発表演題も大きな刺激となりました。特に普段あまり聞く機会のない臨床医の苦労話や、最新の病理診断技術、治療法の開発など多くのことを学ばせていただき、新たなインスピレーションを得ることができました。

この会の特徴として各セッションの合間にはコーヒープレイクとしてのディスカッションの時間が非常に多くとられていることがあります。昼食や夕食後にも交流を促すためのプログラムが盛り込まれており、異分野交流が積極的になされているのが印象的でした。また、誰も知り合いがいないものと思って参加したものの、15年以上前の共同研究者と再会できたこと、よくよく聞くと色んなところでつながっている研究者が複数人参加していることがわかり、この世界は狭いものであることを実感しました。私自身も、新たな共同研究の依頼を受けるだけでなく、こちらからも共同研究をもちかけることもでき、本会の主旨を少しながら達成できたと思います。

とても有意義な会で来年も参加できないのが非常に残念ですが、日本栄養・食糧学会の次世代を担う研究者が毎年参加することにより、学会の研究力の向上に寄与してくれたらと思います。